

1 社会科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 改訂の趣旨や内容を踏まえた教材化

① 新内容の教材化

| 【第3学年及び第4学年】 | 【第5学年】 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 47都道府県の名称と位置 県(都, 道, 府)内の特色ある地域の人々の生活(保護・活用) | <ul style="list-style-type: none"> 世界の主な大陸と海洋, 主な国の名称と位置 自然災害の防止 情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり |

○ 「47都道府県」について

- 47都道府県は47の都道府県全てを学習の対象とする。
- 47都道府県の名称は暗記でかまわない。
- 「名称と位置」とはイメージをつくること。(名称を漢字で暗記することとは違う。)

「北の方にある青森県＝日本全体での位置」
 「自分たちの住んでいる県との相対的な位置」

地道な取組が必要である。全体像をつかませ、部分部分は、その都度活用して定着を目指す。

地図上の名称と位置が頭の中に位置付くこと。
日本をイメージできること。
活用できるようにすること。

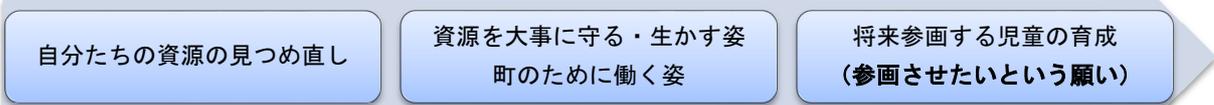
○ 「世界の主な大陸と海洋, 主な国の名称と位置」について

- 47都道府県と同じ趣旨ではあるが, 数は解説で例示されているのみである。
- 覚えるのではなく, 日本を世界全体の中から捉えさせるためのものである。

地球体としての地球
地球体としての世界
地球儀の活用

その中での日本の位置, 方位, 面積を捉えさせる。
その中での日本をイメージできること。
活用できるようにすること。
国際社会の中で活躍する日本人を育てるために必要

- 「県(都, 道, 府)内の特色ある地域の人々の生活(保護・活用)」について
- 子どもの持っている言葉と教師が学習の中で使う言葉をつなぐことが大事である。
 - 「保護」する人の取組と「活用」する人の取組の視点と, 時間的な年表が入るのが大事な要素となる。「活用」には行政的な視点が入ることが多いことに留意する。
 - 地域を元気にする人々の姿を見て, より良い社会の形成に参画する児童を育てる。
 - 「子どもの社会→地域社会＝実感できる社会」



- 「情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり」について
- 学習指導要領の「内容」に書かれていることを, そのまま指導計画の単元の目標としている場合がある。内容には内容の中心となることが書かれてあり, 調べる対象(実証する事実)をアとイで示している。
 - 「情報の有効な活用が大切であること」が内容として取り上げることなので, 教育や福祉等, どんな素材を使っても同じような調べ学習となり, 情報ネットワークの有効性につながるように指導する。

② 「内容の取扱い」等の把握

| | |
|---|--|
| 【第3学年及び第4学年】 | 【第6学年】 |
| <ul style="list-style-type: none"> 社会生活を営む上で大切な法や決まりについて扱うものとする 節水や節電などの資源の有効な利用についても扱うこと | <ul style="list-style-type: none"> 国宝、重要文化財に指定されているものや、そのうち世界文化遺産に登録されているものなどを取り上げ、我が国の代表的な文化遺産を通して学習できるように配慮すること その他、社会保障、国民の司法参加、三権相互の関連、各々の国民の祝日等 |
| 【第5学年】 | |
| <ul style="list-style-type: none"> 価格や費用について取り扱うものとする | |

- ・ 実社会を学ぶという社会科の趣旨にのっとり、社会の要請や変化に対応し、できるだけ現実の姿に近いものを学ぶために取り上げられている。
- ・ 社会的な見方や考え方を養うことを見通して取り上げている。
- ・ 内容の取扱いも読みこなすことが、「社会的事象をどのように捉えさせていくか」ということにつながる。

(2) 問題解決的な学習の充実と言語活動の充実

① 考えたことを言語などで表現する活動の充実

- ・ 調べたことを基に考える。
- ・ 相手にも分かるように説明する。
- ・ 伝え合うことでお互いの考えを深める

学習問題を支える子どもの疑問はあるか。

【問題解決的な学習の充実】

- 1 子どもの問いはあるか
- 2 教材化の視点を持っているか
- 3 子どもに何を育てるのか

【子どもの問いはあるか】

- ・ どのように～ 事実を丹念に調べる
- ・ なぜ～ 意味や意義を考える
- ・ どうすれば～ 自分の考えをまとめる
(どちらが～) 方策や参画を考える

- ・ 子どもは「～が分かった」と書くが、「～と考えた」と書かないことが多い。「分かった」には考えたことが含まれる。⇒「どこから分かったか」「何が分かったか」等を掘り下げることが大切である。

② 言語活動の目的の明確化

- ・ 作品化や発表機会、討論が目的となっている。⇒ **子どものどの力を育てるのか。**
(指導のねらいが不明確な事例) (育成したい力を明確にする。)

③ 社会的な見方や考え方

児童一人一人に社会的な見方や考え方が養われるよう、社会的事象を比較・関連付け・総合してみたり考えたり、社会的事象を空間的、時間的に理解したり、公正に判断したり多面的にとらえたりできるようにすることが大切である。(学習指導要領解説 P.106)

- ・ 中学校の公民的分野(「対立」と「合意」,「効率」と「公正」: 中学校学習指導要領解説 P.100), 地理的分野(地理的な見方と地理的な考え方: 中学校学習指導要領解説 P.20)が参考にできる。

(3) 指導と評価の一体化

① 効果的・効率的な評価の取組

- ・ 評価を指導に生かしたり、評価場面を絞って記録に残したりすることを継続する。

② 子どもの言語表現の確かな評価

- ・ 子どもの言語表現を受け止める準備と子どもの言語表現の読取技術をみかくことが必要である。

2 参考となる資料

- 初等教育資料 平成24年4月号 P.6～8